

2018年11月4日の説教（要旨）

聖書 ローマの信徒への手紙 5：1～2

説教 「神との平和」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

パウロはまだ見ぬローマの人々に宛てて自らの信じる福音の筋道を冷静に丁寧にご話ろうとしています。しかしパウロは、福音の核心部分にさしかかると、しばしば何か抑えきれない高揚した気持ちになって思わず叫びはじめる、あるいは歌いはじめるのです。神をほめたたえずにおれなくなるのです。5章冒頭もそのような箇所の一つでしょう。

「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、・・・」と語りはじめます。私たちに起こっていることとして、まず「神との間に平和を得ている」というのです。神の義にあずかった私たちに与えられたのは神との平和です。平和とはギリシア語でエイレーネーという単語で、もともとのユダヤの言葉であるヘブライ語ではおなじみのシャロームです。それはただ何の波風もたたず平穩無事であるということではなく、正しい関係が結ばれていて、そこに生き生きとした生命が満ちあふれているさまを指す言葉です。神との間に平和を得ているとは、神との正しい関係に結ばれていて、生きる喜び、生かされている幸いを知っているということです。

平和という言葉は平安とも訳せますし、そう訳した方がぴったりとくる場合もあります。しかし、この箇所はどの日本語訳聖書も平和と訳しています。つまり、心理的主観的な心の状態や気持ちの持ちようではなく、そこに解消されないもっと客観的な神との関係が言われているのです。神に背き、神を嘲笑い、神に敵対していた私たちが、主イエス・キリストのゆえに、罪ゆるされ、神に受け入れられ、生かされているのです。神に対して目をそむけたり伏せたりするのではなく、私はここにおります、と神に目をあげることができる関係です。たとえ日々の生活の中に、悩みや迷いがあり、苦しみや悲しみがあつたとしても、神が私たちを根底から支え守っていてくださり、神との揺るがぬ関係が与えられているのです。後に出てくる表現を先取りして言うならば、私たちと神との間には、キリストを通して和解が成立しているのです。

この神との平和について、2節では「このキリストのお蔭で、今の恵みに信仰によって導き入れられ」と記されています。この部分は、直訳すると「彼によって、立っているこの恵みの中に信仰によって入ることができている」という言葉遣いです。すなわち、神との和解が成立し、神との平和を回復された者は、神の現臨しておられる聖所に招かれ導かれているのです。かつて旧約時代には大祭司だけが神殿の奥の至聖所と言われる場所に入ることができ、罪深い私たちは近づくこともできませんでした。しかし今や、イエス・キリストによって罪赦されたすべての人は、神の恵みのもとに導き入れられているのです。

かつて宗教改革者マルティン・ルターはウォルムスの国会に出頭を命ぜられ、その主

張の撤回を求められたとき、「私はここに立っている。私はこのほかの何もなすことができない。神よ、私を助けたまえ」と言いましたが、私たちも確かな恵みの立脚点が与えられているのです。

ダビデの詩として親しまれてきた詩編 23 編の 5 節には、「わたしを苦しめる者を前にしても、あなたはわたしに食卓を整えてくださる。わたしの頭に香油を注ぎ、わたしの杯を溢れさせてくださる」と歌われています。主の天幕の中にいったん導き入れられたならば、たとえ敵に狙われ追われて逃げてきたとしても、もう危害を加えられることがないのです。その幕屋の主人に守られ、敵の前で悠々と油を注がれ、杯をあげることができる、そのような幸いが歌われています。神との平和が与えられたといい、神の恵みの中に導き入れられたとはそのような確かさであり、喜びなのです。

そして、2 節後半には、神との平和、今立っているこの恵みを踏まえて、私たちに与えられた将来に向けての希望が語られています。「神の栄光にあずかる希望を誇りにしています」と書かれています。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなって」いました (3 : 23)。しかし、キリストの贖いの御業がなされ、神の恵みによって、私たちは神との平和が与えられたので、今は「神の栄光にあずかる希望」を大いに喜び、誇ることができるようになったというのです。誇りという言葉は、ローマ書のこれまでのところではあまり良い意味では使われていませんでした。高ぶりに通じる人間的な誇りだったからです。パウロもかつては熱心なユダヤ教徒としてそのような誇りに生きていました。けれども、パウロは今、キリストと出会い、その恵みを知らされて、自分には弱さ以外に何も誇り得るものはなく、ただひたすら神を誇りとする者に変えられたことを、感謝と喜びをもって語っているのです。

神の栄光にあずかるとは神を神として崇めることです。そして、神の美しさ、神の輝きをいただいた者として、それを照り輝かすことです。私たちの現実には神の栄光とかけ離れ、およそ似ても似つかないものであるかもしれませぬ。信仰に生きる私たちも、日々さまざまな試練と誘惑の中で悩み惑い、汚れと弱さを身にまとっています。けれども、神はキリストの救いにあずかった私たちを、ついには御子の姿に似たものとしてくださるのです (8 : 29)。私たちにはそのような終わりの日の輝かしい完成が約束されています。その希望こそが私たちの誇りなのです。

愛する者との別れがあり、病との厳しい戦いがあり、心身の弱さや衰えにしばしば直面する私たちです。しかし、そこでこそ新たに気づかされるキリストの恵みがあるのではないのでしょうか。私たちは神との平和を得、神の恵みに堅く立ち、神の栄光にあずかる希望を喜ぶ者として召されているのです。